

言霊使いのリザ

淫獄儀式の学園

立ち読み版

千夜詠

挿絵 / taro

18
未 満

二次元ドリームノベルズ

序章	006
第一章	012
第二章	061
第三章	111
第四章	138
第五章	175
第六章	220
終章	252

牝狩りの学園島

屈辱に染まる夜

恥辱の教室

マゾ性奴隷宣言

学園ヒエラルキー最底辺の少女

狂淫儀式の終焉

世界は今日も保たれている

しんなり
真鳴リザ

総魔の姫に仕える六柱の一人として魔術界の平穏を守る実力者。何気なく口にした事でさえ真実になってしまう強力な言霊を使う。クールな容貌に反して根は熱血漢。



れんごくいん ぼたん
煉獄院牡丹

呪術界で歴史のある退魔師一族の娘。幼い頃から妖の類を祓ってきた経験があり、百年に一度の天才と呼ばれている。互いにプライドが高いリザとはよく仕事先で衝突する仲。

え ぎ あき こ
江木 暁子

学園の生徒会長。令嬢風の派手な外見だが他人を思いやることのできる女性で、強い意志をもって女子生徒たちを守ろうとしている。

——罰なら見せしめに、会長さんの秘密を女子全員に暴露してもよかったはず。それなのに、逃がして、好きにさせていたのは……誰かに泳がされていたってことです。

意識的か、無意識にか、嘩子は黒幕に利用されている可能性が高い。

牡丹はポケットから護符を一枚取り出す。まずは一度、嘩子を落착させなくてはならないと考えたが、

「あ、あれ……？」

手足から力が抜けていく。膝が震え、だらんと垂れ下がった手から、はらりと護符が落ちていった。

——まさか……っ！

まぶた 瞼の落ちてきた瞳が向かった先は、先程口にした紅茶だ。薬物——呪術的なものに敏感な牡丹も、それ以外の方法には気を配れなかった。

「やっと効いてきたみたいだな。よくやったぜ、嘩子」

生徒会室の扉を開いて、顎髭を生やした大柄な男と数人の男子が入ってくる。

「大場……」

その男の名を口にした嘩子は辛そうに顔を横に向けた。

——こいつ、確か、大場小太郎……。黒幕に一番近い奴……。と、ともかく、何とか、ここから逃げないと……。

まだ足の動くうちに——扉に振り向きかけたその時、

「ヒイっ！」

男子ら全員が、下半身を剥き出して牡丹を囲んできた。裸の嘩子に反応してか、それとも小柄な獲物を追い詰めた興奮からか、もう既に肉棒は強張りとなつて欲望を表している。肉体的にも精神的にも動けなくなつてしまつた牡丹をいかつい男達の腕が捕まえ、会議用のテーブルの上に仰向けに寝かされる。

「ほら、じつとしてろ。まあ、頑張つたところで、満足に動けやしねえだろうが」

事実その通りなのだが、自分の手足を押さえつける男子らを半分涙目になつて牡丹は睨みつけ、抵抗の意思を露わにした。

「ごめんなさい、ごめんなさい牡丹さん。こ、こうでもしないと、私……。私、もう、狂つてしまひそうなの。んっ、ハぁ……っ」

体格の良い大場が嘩子の肩を抱くようにしながら、彼女の乳房を鷺掴みにする。荒々しい指先は、豊満な乳肌^めに減り込み、指と指の隙間から柔らかな肉が盛り上がった。

乱暴に揉みしだかれるたびに、金髪の生徒会長のフタナリペニスはぴくんと跳ねて、だらつと大量のカウパーが床に滴っていく。

「あ、貴方達、いったい、何の目的で、きやつ！」

ベリッ^っと牡丹の制服の胸元が破かれる。瞬間、頭の中が羞恥でいっぱいになつて、表情を引き攣^つらせた。

「おいおい、こいつ……。マジかよ」

他人の裸体を見るのに慣れていないように、見られることだって慣れていない。だが、それ以上に問題なのは、

「こいつ、ノーブラだったのか。小さすぎて、必要なかったとか？」

「いや、実は密かに露出好きだったのかもよ。乳首が擦れるのを気持ちよがっていたとか」
私服は殆ど和装である牡丹。本来ならそれに合わせた和装下着を身に着けるのだが、悲しいことにその意味がなかった為、ずっとブラジャーを持たずにいたのだ。

「み、見るな……、見るなァっ！」

乳首を中心にささやかな膨らみを見せる華奢な体つき。成熟した女体にはない背徳的なエロスを醸し出し、男らはかえってしげしげと、健気に女を主張しようとする成長途上のようなそこを見詰め回す。

——悔しい……、恥ずかしい……。だけど、ち、力が入らない。ん……っ、ダメ……、体に毒が回って、ふァァ、嘘っ、下半身が痺れて……、嫌ァっ！

薬の影響で、体中の筋肉が緩んでしまったような感覚になる。すると、尿口が弛緩してしまい、今にも失禁してしまいそうになった。

「見た目通りの可愛いチッパイしてるじゃねえか。じゃあ、こつちも期待できるんじゃないやねえの、へへ……」

「お前、本当に好きだな。まあ、俺だって、嫌いじゃねえし。時間じゃねえのが残念だけど……」

このつ、このつ、と体を揺り動かそうとするが、ビクともしない。

スカートの裾に男の手がかかる。途端に、恐怖に体が固まったようになって、全身に震えが走った。

「や、止め、止め……、きゃ——っ！」

捲られた瞬間、心が竦み、ぎゅつと瞳を閉じた。集中する視線の熱さに耐えながら、興奮する男子らの息遣いが聞こえると、怖気を感じずにはいられない。

「おほっ、エロカワ……、いいね、いいね」

「なかなか、いい趣味してるじゃねえか。てつきりクマさんとかウサギさんとかあるかと思つたが……、ありだな」

小柄で年よりも幼く見えてしまう自分への反発がそこから見て取れる。

牡丹の腰下から股間を覆っていたのは、布生地も薄く少ない、白い紐のショーツだった。羞恥と緊張から、汗ばみ、微かに蒸れていて、股座にびっちり張り付いている。僅かに食い込みぎみに、後ろ生地は尻肉の上の方にずれ、股間の中心では女の子の証であるワレメの形状がほんのりと浮き上がっていた。

確認されてしまった瞬間、くらくらするほどの羞恥にとうとう踏ん張りが利かなくなつて、

「や、やあアっ……、で……ちやう……」

じゅわつと漏れた失禁水が下着の内側から染み込み、脇から漏れ、まるで子供のままの

ような肉裂の形状が透けてきてしまう。

「こいつ、漏らしやがった」

「おいおい、オシメでもした方が良かったんじゃないか」

劣情の籠った嘲笑に囲まれ、唇を噛み締めながら、牡丹のきつく閉じた大きな瞳から涙が零れていった。嗚咽を漏らし、ただ羞恥に耐える。

男子らはあきらかに興奮を高めていて、今は四肢を押さええているその手が、いつこの身を穢しにかかるか分からない。

「うっ……う、うう……、あ、貴方達、こんなこととして、校則違反です」

何処までできるか分からないが、言いくるめて危機を脱する他に手を思いつかない。

「ああ、確かにそうだ。でも、女子がするぶんには、果たして違反に咎められるのかどうか……。まあ、俺達以上に、もう我慢できないようだしな」

大場に乳房を揉まれながら、嘩子は荒々しい興奮した息遣いで、自身のフタナリペニスを両手で扱きだしていた。可憐なその手は、ぬちゃぬちゃしたカウパーに塗れている。

「牡丹さん……。私、私……。も、もう……」

「ちっ、盛り付きやがって……。おい、お前ら、会長を押さえつけていろ」

大場に命令された二人の男子が両脇から嘩子を後ろ手にして、彼女の動きを封じた。

「いやですわ、な、何を……?」

「約束通りに、その赤毛の巫女を犯させてやる。だが、その前に……」

顎髭の男子リーダーが取り出したのは、豆粒のような物。刹那恥辱を忘れて、牡丹はそれを観察した。

——まさか、あれが、種？

今にも爆発寸前のようなフタナリペニスを大場に掴まれ、嘩子の腰がビクつと引かれる。

「じつとしてろ。こいつを、ここにぶち込んで、だな……」

「い……っ！ ハア、ハア、ハア……」

クリトリスを改造した肉棒の先端、その尿道孔に種が挿入された。一度、痛そうに眉根を寄せた嘩子だったが、直後にはだらしなく表情を緩め、うっとりとした瞳で牡丹を見詰めてくる。

「そ、それって……アンタ達も与えられたっていう……」

彼らの計画が上手くいっているせいか、大場は自慢げに言った。

「ああ、悪魔の種っていうそうだ。こいつのお蔭で、俺達は、この学園を、この島を楽園にできたってわけだ」

——悪魔の種!? 聞いたことがある。確か、不安定な状態で召喚されてしまった悪魔を圧縮して、休眠状態にしたもの。それを人間に移植すると、相応の力を得ることができる。とか。で、でも、その見返りに……。

重要なことを思い出した。そのことを告げれば、彼らの愚かな行為を止めさせることができるかもしれない。

「ちょ、ちょっと、貴方達、そんな物の力を頼りにしていたら……、ヒッ！」

だが、近づいてくる嘩子の様子に、牡丹の意識は危機感だけに集中してしまう。

「牡丹さん、ごめんなさい。でも、もう、我慢なんてできないの。女の子の気持ち良さを、私のオチンチンが知ってしまったからですわ。も、もう、童貞ではいられません」

興奮した深い呼吸に、嘩子のたわわな胸元が揺れている。大して暖房も効いていないのに、彼女の女が匂い立つ肌はほんのりと汗ばんでいて、何かに憑りつかれたかのように瞳は虚ろだった。

「会長さんっ！　だ、ダメ……、女の子がそんな……」

表情が強張り、見開いた瞳に凶悪な逸物が入り込む。

「知りたいの。ほら、牡丹さんに、この子、こんなに反応しますわ」

ニタニタと笑う男子らの環視の中で、女の子が女の子をレイプしようとしている。

芸術家でも惚れ惚れしそうな嘩子の裸体が覆い被さってきた。見下ろしてくる妖艶な麗顔に、牡丹の頬も赤くなった。

四肢を押さえていた男達が、小柄な牡丹の体を少し移動させると、赤毛の少女の腰はテーブルの端に引っ掛かり、同時に、硬く、生々しい肉塊が濡れたショーツ越しに肉裂を突いてくる。処女の本能が全身に力を込めさせた。

「ヒ……ッ！　やだ……、しょ、正気に戻ってっ！　今の会長さんは、悪魔の種の影響で、変になっただけなんです。だから、うつ、い、イヤア……」

グリグリとフタナリペニスの先端が無垢な少女自身を圧してくる。牡丹の小水の上に、唾子のカウパーが滴つて、直ぐに混ざり合つていった。

「牡丹さんのお股の柔らかいところ、ぷにぷにして、き、気持ちいい。ハア、ハア……、この布……邪魔ですわ」

恍惚に涎を漏らしそうな唾子に、牡丹の声は届かない。

「やめてええ——っ！」

アンモニア臭い下着が鼠蹊部の脇にずらされ、穢れを知らない蕾のようなワレメがとうとう露出させられてしまう。

艶々とした土手肉は僅かな盛り上がりを見せ、垂直に切れ込むような縦スジは、ちびつ子みたいな彼女を取り囲んだ男子らの期待通りに純真だった。だが、放たれる甘酸っぱい粘膜香は確かに牝そのもので、お漏らしして蒸らされた熱気が立ち上がってくると、秘部であり、恥部であるのだと教えられる。

「はは、ほんとにこいつ、よく俺らと同じ学年に入ってきたよな。早く悪戯してえ」

「俺からしたら先輩つすよ、スジマン先輩と呼んでいいっすか？」

消え入りたくなるような恥辱に、凍えたように全身が震えてしまう。

——もう、やだあ……。どうしてこんな辱めを……。ダメ……負けちゃ……。何があつても、気持ちをしつかり持たないと。

「ば、馬鹿にしないで……。こんな葉なんか、直ぐに浄化して……。あつ」

周りは剥き出された肉棒だらけだった。生臭い男臭を帯びて、パンパンに腫れ上がった先端から、まるで御馳走を前に涎を垂らしているかのように淫水を滴らせている。おかずは自分の肉体で、それを意識した途端に、心が折れそうになった。

「うはア、可愛いですわ、牡丹さん。ちっちゃくて、きつそう。こんなところに挿れたら、きつと、きつと……、ハア……」

もはや狂気すら滲ませる嘩子の表情に怖気が走るのだが、強がった発言に反して、葉が回った全身は完全に力が入らず緩んでしまう。

その機を逃がさぬように、

ぬぶ……っ！ 一層カリを膨張させた肉棒が、つるつるした淫裂を割り広げてきた。

「あ……ア、そ、そんなの無理……、む、無理いつ、いいつつ！」

「大丈夫ですわ。私だって、最初はそう思ったものですけど、女の子のここって、けっこう……飲み込んだじゃうんですのよ！」

ずぶっ！ 小指さえきつそうな愛らしい窪みが、メリメリと軋み、肉魂に押し広げられていく。微肉を巻き込むように膣口が減り込んで、ヒリヒリと焼かれるような痛みと共に、重圧が下腹部の内側を苛んできた。

「ひぎ——いつ！ さ、裂けるうつ……う、牡丹の大事なこと、破れるうつう！」

ピュッ、ぷしゅ——っ！ 挟り込んでくるフタナリペニスに、漏らしたおしっこを引っ掛けながら、衝撃に白目剥きそうになって、舌を突き出してしまう。

「はあ、あったかい……、可愛い女の子のおしっこ、興奮しちゃいますわ。ああっ、こ、これが、オ、オマンコの中……、オマンコの感触……」

激痛に腰を身悶えさせる。だがかえって、その動きがグリグリと肉棒を捻じ込ませ、プチっ、と薄い秘膜を貫通させた。破瓜の証である赤が垂れていく。

——私の純潔……、何人もの男子の見てる前で、女の子に奪われた……。これは、悪夢？ 悶絶しそうな赤毛の少女に構うことなく、衝動のままに嘩子は逸はやって、腰を前へと突き込んでいった。

ずぶずぶ……っ、滑りを帯びた狭い膣が肉棒の太さのままに広げられてしまう。

「んあ……っ、あ……あ……、酷い……」

腹部の薄い脂肪に微かに浮き上がる巨根の形状。肉体以上に、乙女の心が鞭打たれたように痛い。

「ほあアアア……、き、気持ちっ、イイ——っ！ オチンコっ、こんなに良くなるなんて……、おっ、くるう……」

びゅくんっ、びゅくんっ、と牡丹の中で、恍惚の表情を浮かべる嘩子の強張りが跳ねだした。捻られるような感覚にツインテールの巫女は呻く。なのに自由の利かない身体は彼女を肉の人形として、欲望を飲み込むだけの存在に貶おとしめている。

「ぬ、抜いて……、お願い……ですから……」

惨みじめだ。悔しくて堪らないのに、哀願するしかもうできない。

「ハアハア……、ダメ……ですわ。でないの……ザーメン。私の早漏チンポ、今、確かにイったのに、た、種に堰き止められて……。狂おしい、狂おしい、狂おしいっ！」

ぬぶっ！　ぬぶぶ——っ！　やるせない想いをぶつけるように、狂乱の腰付きで嘩子は牡丹の肉壺を掻き回す。

「い……っ、痛いっ、痛いっ！　やめっ……あがアア、ほんとに壊れるううう」

一突きがハンマーで杭を打たれているような衝撃で、絶え間なく抉られてしまう。膣口は捲れ上がり、粘膜は苛烈な摩擦で赤く腫れ上がって、弛緩した尿口はお漏らしを続けた。嗜虐的な瞳で男達は見詰めている。

「くそ、我慢できねえ。し、扱いていいか？」

「我慢しろよ。お楽しみは、夜までとっておけ。溜め込んで、アイツにぶち込んでやるんだろ」

力の抜けたまま自分では動かせないのに、嘩子の猛烈なピストンで腰が躍らされる。恥骨が突き上げられて、可愛い肉芽が揺さぶられると、痛みの中に、微かな快感が芽吹いてしまう。

コリコリと硬く痼りだした乳首が、細長い嘩子の指に摘まれた。

「ヒイ——っ！　そこっ、敏感なっ……、痛っうう……う」

「ごめんなさい、ごめんなさい……、ハア、牡丹さんの痛がる顔が、可愛いすぎてえっ、もっと興奮させてくれなきゃっ、出ないいいっ！」



股間を僅かに開く。これだけでは、誰にも気付かれるはずなどないのに、緊張感が高まってきた。

「はあ……」

少しだけ深く呼吸し、心を落ち着かせようとする。

片手を机の下に移動させて、無理のない体勢で指先を潜り込ませられるように、ゆっくりと制服のスカートの裾を上げ、自身で太股を撫でた。

ようやく始まったと瞳を輝かせる命令を送ってきた男子。彼とリザの間には、一人だけ女子が挟まっている。

——き、気付かれないわよね。

きつと今の状況では女の子に知られる方が恥ずかしいだろう。

とても戦う者とは思えない繊細な白魚の指先が、むっちりとした大人びた太股の内側を這って、奥へと侵入していった。進むほど、体温が高くなっているようで、蒸れた湿った感覚がついてくる。

手首から先はスカートの中に隠されていた。何も直接触ることはない。しているように見せるだけで十分なのだ。

薄布一枚に包まれた股座の僅かな手前で、蠢かせるように指先を動かしてみせる。だが、羞恥心がどうしても拭えずに、少し困ったような顔つきになっても、艶が足りなくなってしまう。

それが愚計を見破らせることになった。

「おい、本気でオナニーしてんのか？ 後で下着をチェックするから、もし全然濡れていなかったら、二人がどうなるか分かってんだろうな」

気付かれた！ こと淫猥なことに關しての男子の注意力を侮っていたことに気付き、リザは口角を下ろした。

追い打ちをかけるように、

「授業が終わるまでに、下着をぐしょぐしょにしておけ。生地を通り越して、下に滴るぐらいにだ」

「な……っ！」

つい声をあげそうになって、慌てて噤んだ。幸い、周りには気付かれていない。

感じないつもりの方が裏目に出ている。しかし、どうすればと悩むほど選択肢はなかった。方針を変えるしかない。感じるようにしても、自分が心からそれを望むようにならなければ、十分に生け贄として機能しないはずだ。

私は決して快楽に溺れたりはいしない。

問題は、要求通りに淫蜜で下着をぐしょ濡れにできるか、だった。

オナニーの経験がないくらい純情だと嘘はつかない。総魔の姫の屋敷にいても、性的な刺激を受ける場面は実は多々あって、呆れて興味のない振りをしながらも、こっそり秘部を弄ってしまったこともある。

ただそれは、リザのイメージに反して、乙女チックに未来の恋人とのことを想像したりして行うもので、滲み出る愛液の量はそれほど多くはなかった。

——条件を満たすには……あれをするしか……。

顔を伏せ、ほんの囁き声で呟いた。

『わ、私は、授業中にこっそり、オ、オナニーして、愛液を垂れ流すほど、か、感じる』ドクンと心臓が跳ねる。呟いた恥ずかしい言葉だけでも顔が真っ赤に熱くなるのに、体内の魔力が活性化して、全身を炎が包んだように感じてしまう。

「ハァ……っ、はあ……、何……？」

今更なのに、授業中にしようとしている行為に強い羞恥心が湧いて、それがドキドキとスリルを覚えさせる。

——これも、言霊の影響なの？ いや、周りの気配が凄く気になって……。気になるほど、う、疼いている？ 私のあそこ……疼いてしまっている。

言葉の選び方を間違ったのだろうか。気持ちをしつかりと持ち直し、感じても、それに吞まれないようにと自身に言い続けた。

せつかに催促のメッセージが届く。リザは、途中で止めていた指先を最奥へと移動させた。

「んんっ！」

下着越しに微肉に触れた途端、予測した以上に快感が溢れて、リザはもう一方の掌で唇

を覆い隠した。

既にクロッチの下方に微かな湿った感触があつて、夏場でもないのに股間は酷く蒸れてしまつてゐる。ぬるつとした感触が指先に伝い、授業中の教室で女陰を濡らしている事実呼吸が乱れ始めていた。口元を覆った掌に温かく湿った息が吹きかけられる。

――魔力が内に溜まつてゐるせいなの？ こんなに効いてしまふなんて……。

戸惑つてはいられない。制限時間は授業が終わるまで。それまでに、下着全体を淫蜜塗れにしなくては、牡丹と嘩子がどんな目に遭わされるか分からないのだ。

処女を奪われたとはいえ、膣の性感は未知数だ。周りの反応を気にしながら、リザは指先を一番敏感な場所へと向かわせる。

「う……、や……剥けて、きちやう……」

クリトリスが膨らみながら、包皮を捲り上げてしまう。それは信じられないくらいに肥大を続け、接触する指先をショーツの内側から突きだした。びくつと身を震わせてしまい、後ろの女子が何事かと怪訝そうに顔を上げた。

――き、気付かないで……。

どうやら居眠りぎみだった彼女は、直ぐに気にすることなく、再びこつくりと半眠状態になつた。

ほつとしてはいられない。なにせ、おぎなりに行われる授業を真剣に聞いている者は少なく、そのくせ私語もしていないので、静かすぎるほどのだ。

くちゅつと濡れた摩擦音だけでも、聞かれてしまうのではとりずはハラハラさせられる。それでも条件を満たす為に、自慰は続けなくてはならない。

下着越しに、小指の先程までに膨れた肉芽を転がすと、快感の電流が一気に脳髓まで駆け上ってきた。

「はう……っ！ あっ、ああ……、クリ……す……」

これまで触れた時に、これほど強い刺激を感じたことはなかった。

物理的なもの以外に、こっそりオナニーしているスリルと羞恥が強い興奮を呼んでしまっていた。

——だめ……、体は感じてても、こんなこと、いいなんて思っちゃ……。

自分では興奮の自覚はなかった。だが確実に、息遣いは深く乱れ、上半身でも乳首がしっかりと硬い瘤しりりとなり、円柱状の突起と化している。

腰も勝手にもじもじと動き出して、思考だけが、誰かに見つかりませんようにと祈っていた。

その反面、タイムリミットが頭を過り、まだ誰かに気付かれた形跡がないと分かると、肉体はより大胆な行為を望んでしまう。

——あいつ以外……誰も、見ていないわよね。

順調に濡れ染みの広がりは下着の脇から、指先を内側に潜り込ませた。

「いやア……ぐちよぐちよして……蕩けてる……」

牝汁塗れの粘膜が、ぷにぷにと指に弾力を感じさせ、湯気立ちそうな熱気がそこから漏れてきてしまう。絡みつく淫蜜がどろりと指間を垂れていった。

——すっごい、私……、授業中なのに、オ、オナニーしちゃってるうつ！

肉体の反応が感情に影響を齎すのか、刹那、変態行為を愉悅する自分に気付いてしまう。——ち、違うっ！こ、こんなこと、したくてしてるわけじゃないのに……。

全ては言霊の影響なのだろうか。安易な考えが頭に浮かぶ。

後で、言霊で体を元に戻せばいいだけ。今だけどんなに感じてても、私は決して快楽への誘惑に負けたりしないはず。

肉ビラの内側に溜まり込んだ滑りに任せて、指先を肉壺まで進行させた。膣孔は牝汁を吐き出すようにヒクヒクと蠢いている。掌でクリトリスを圧しながら、中指を大胆に潜り込ませ、膣孔を擦っていった。

「うぐ……っ、こうやって、愛液、掻き出して……」

くちゅ、ぬちゅ、ぬちゅ、ぐちゅぐちゅ……っ！辺りを気にしながら、潤みだした瞳で授業中の様子を窺い、片手はその間も熱い女陰を弄り続けている。教師の話に耳を傾ける者、退屈そうに欠伸あくびをする者、机の端末を操作する振りをしながらゲームに興じている者がいた。命令を下しているもの以外、まだ誰も……。

——えっ、嘘……!!

隣の女子が真っ赤になっている。こちらに視線をわざと送らないようにしているようで、

ほんの僅かの間だけこちらを向くと、また慌てて机のモニターに瞳の先を戻した。

——き、気付かれています！ 私が授業中にオナニーしてるのっ、知られて……。

「はアア……、ハア、ハア、ハア……」

恥ずかしさが上昇すると同時に、興奮が高まってしまふ。だが、これが危険な兆候だともまだ分析できて、リザは刹那、悩んだ。指先の動きが止まる。

そんな一部始終を観察していた男子から、オナニーをし続けなければ二人を酷い目に合わせるというメッセージが届いた。

自分の恥辱よりも優先することがあるのは、最初から分かっていたこと。

『わ、私の指は、授業が終わるまで、股間から離れず、ずっと、いやらしく弄り続ける』
もう躊躇しないように、使命を果たすまで耐える決意をし、自身の肉体に言霊を重ね合わせた。

「んっ……んんっ、指っ……、入って……、うほっ……」

ぬるりと中指の先が肉壺へと潜り込んだ。ぴちゃっと淫蜜が飛沫をあげたようで、制服のスカートにまで飛び散ってしまう。

きゅつと指に張り付いてくるそこは、犯されて、処女を奪われた時とは違い、明確な性感が沸いてくる。今朝がたまでバイブで虐められていた内粘膜からは痒みのような感覚が起こつていて、指先で奥まで掻き^{むし}塗りたくってしまう。

もう十分に要求は満たした。あとは、授業が終わるのを待つばかり。

安堵の為、表情さえ快楽にだらしなく緩みそうになったその時、

「ええ、では、この問題を……真鳴さん、前に出て、答えてください」

「へ……!!」

瞬間、何も考えられなくなり、次に全身に冷や汗が噴き出てきた。

それまで淡々と説明のみの授業を行ってきた男子教師が、不意にリザを指名して、問題の解答を求めてきた。

それだけで、クラスの視線はリザに集まる。命令してきた男子だけは笑いを堪えていた。

「どうしました真鳴さん、返事は？」

「は、はい……」

やりとりの間も、リザの片手はスカートの中に潜り込んだままで、指先の一本は肉壺の中に押し込まれたままだった。近くに座っていた者は、もう何人か異変に気付いているかもしれない。

——どうするの？ 言霊のせいで、手が、まだ勝手に、ハア、ハア、気持ち良くさせてくるう……。いや、こんな姿……クラスの全員に、み、見られたら……。

遠くの席にいた者らも、これまで堂々とした態度だけを見せてきたリザの様子が違っていることに気付きだして、ざわつく囁き声が聞こえだした。

「真鳴さん、早く」

急かす教師もニヤニヤと笑っていた。彼もグルなのだと気付く。

そうなれば、どうあつても逃すまいとしてくるに違いなかった。唇を噛み締め、泣きそうだが、憎悪を滾らせた瞳で前を見据える。

「前に出て、う……っ、ハアハア、も、問題を解けば、い、いいんですよ」

早く終わらせてしまおう。震える膝に叱咤するように力を込めて、リザは立ち上がった。その途端、女子の小さな悲鳴が聞こえる。

「きや……っ、や、やだ、何……」

男子はテンションを上げて、身を乗り出してきた。

「おいおい、マジかよ」

黒髪の転入生、今や女子全員の希望となつた学園一の有名美少女が、授業中に片手をスカートの中に入れ、その動きはあからさまに自慰のそれだった。捲れたスカートの裾の下から、粘膜の擦られる甘酸っぱい匂いが放たれてきて、彼女の一带を卑猥な空間へと変えていく。

——お願い……、そ、そんなに一度に、こんな恥ずかしいところ、見られたら……。

太股の内側を溢れかえつた淫蜜が一筋垂れていった。

ざわつく教室の中、予め分かっていた教師はそれほど慌てることもなく、

「おやおや、いったい、真鳴さんは、何をしていたんです。授業中ですよ」

「す、すみません。んはっ、んっ、んっ……」

自身にかけた言霊はもはや呪いとなつて、授業が終わるまでは、オナニーを止めさせて

はくれない。

「うわ、まだやってるぜ。そうとう欲求不満だったのか？」

「いやいや、あそこまでいったら、ただの頭のおかしい変態だろ」

「変態でも、あれだけいい女だったら大歓迎。俺が相手してやるぜ」

好き勝手に言う男子の声を聞きながら、中指は更に膣内の奥へと掻き回しを広げ、くちゅくちゅとした猥音が響いてしまう。

女子は全員俯いてしまつて——何で、リザさんが、あんなこと——泣き出してしまつた子もいた。

——ごめんなさい、皆……。でも、こ、こうしないと……。

恥ずかしさは、女子の心情を考えることで堪えた。ようやく現れた救世主の痴態を目の当たりにした彼女らの心の内は想像に難くない。

「で、では、問題を解きます」

「いや、真鳴さん、先に、貴女が何をしていたか、いや、何をしているのか、答えてください。いったい、スカートの中に手を入れて、どういう理由で、そんなことを？」

「そ、それは……」

最初に命令してきた男子が、答えを間違えるなど言いたそうに、とんとんと机のモニターを叩いた。牡丹と曄子の運命を握っているのだと、再び意識させられる。

「オ、オナニー……です。私は今、オナニー……しています」

普段は大人びた大和撫子の雰囲気を持った美少女の口から、破廉恥な行為の名称が出されたことで、男子らは興奮を高めた。

一方で、リザの顔は火が出るように熱くなってしまう。その上昇していく恥ずかしさに合わせて、掌がグリグリと肥大した肉芽を押し付け、気付かぬうちに羞恥と快感が一致していった。

「なんと、授業中にもかかわらず、オナニーしているのですね、真鳴さんは！ クラスの皆が真面目に授業を受けている中、一人だけ、オナニーして気分を出していたというわけですね！」

「く……っ、はい……、そ、そうです。う……、ハっ、ハア……」

どうあっても長い時間、晒し者になりたいのだろう。そんな仕打ちに負けるつもりはないが、頭の中がクラクラしてきて、全身に悦楽の痺れが回ってきてしまう。

「やれやれ、しかし、いったい、どうして……」

わざとらしい演技で困った様子を見せる男性教師。

「そ、それは……」

「先生！」

あの命令を最初に下した男子が手を上げた。

「先生、真鳴さんは、きつと露出狂なんだと思います。転入したてで、ストレスも溜まっていたんでしょうね。一度発散させてあげたらどうでしょうか？」

「ふむ、なるほど、それはいい考えです。では、特別に時間を差し上げますから、真鳴さん、私達が見ていてあげますから、その教壇を使って、存分にオナニーしなさい」
「なっ！」

ぞつとする提案だ。いくらオナニーをし続けなくてはならないとしても、それをわざわざ目立つ場所で見せつけるなんてとてもできない。

「どうしました？ 真鳴さんは、露出狂なのでしょ。見られて、感じるのですよね」
教師の眼光と声のトーンは脅迫じみていた。

——やっぱり、先生も、知っている！ そう、蛭子川の差し金ってことね……。

ここで否定の言葉を吐けば、自分は助かるかもしれない。学園長の野望を打ち砕くこともできるかもしれない。だが——。

——ごめんなさい、姫様……。嘩子さんも……牡丹も見殺しにできない。

牡丹の祖父には多大な恩義がある。彼の作ってくれたチョーカーのお蔭で、言葉を気にすることなく他人と会話できるようになったのだ。それは、幼少のおり、長く孤独を味わった彼女にとっては人生を変えてくれた救いの一つである。

「はい、『私は、恥ずかしい姿を、見られると、か、感じる、露出狂』です」

途端に、周りから集中している劣情の籠った視線が全身を愛撫しているように感じてしまう。

「うわァ、変態ですね、貴女は……。では、変態の露出マゾな貴女の為に、貴重な授業時

間を割いてくれたクラスの皆さんにお礼を言いませんとね」

「う……、はい、皆さん、『露出狂な、へ、変態……マ、マゾな私』につきあってください
って、あ、ありがとうございます。ハア、ハア……」

恥辱に心を苛まれながら、だが、クラスメイトに向き直った表情は、だらしなく唇を開き、とろんと瞼を下ろし、甘ったるい吐息を吐き続けていた。

「では、真鳴さんは、その教壇に座って。皆さんには、急遽、授業内容を変えて、変態の生態について、お勉強していただきます。ほら、その女子達、顔を上げて、しっかり観察しなさい」

クラスメイトに向かって、教壇の机に座ったりザ。そこからは、自分を見詰めてくる学生らの姿がよく見えた。欲望剥き出しの顔をした男子らより、裏切られたような恨めしい瞳を向けてくる女子からの視線の方が痛い。

——どうしてなの？　そ、そんな風に見られると……、余計に、か、感じやすくなつて……、言霊のせい？

呪いの言葉は、片手をショーツの内側に潜り込ませたままで、ずっと蕩けそうな女陰を弄り続けさせてしまっていた。

「ほら、もっとよく見せてもらわないと、勉強になりません。貴女も燃えてこないでしように」

教師の手はスカートを捲り上げる。

「ハアつつ、は、恥ずかしい……」

艶やかな唇の端から涎が漏れてしまう。衝動が起こって、リザは蒸れた太股を大きく左右に広げた。

「おおっ！ すっげえ……、パンツも、オマンコもぐしょぐしょ……」

「うわっ、なんだよ、あの手の動き……、ドスケベえっ」

「オマンコの匂いが、ここまで届いてくるぜ。堪ねえな」

鼠蹊部に注ぎ込まれてくる視線の渦に、肉裂から発した熱が全身を覆いつくしてくる。

——あ、熱い……、全身がウズウズして……、服を着てられない。

意識が、露出マゾに乗っ取られていくようで、必死で言霊に精神が対抗しようとするのだが、片手は制服の上着とブラウスを持ち上げてしまう。

「ハア、ハア、オ、オッパイも……見てえ……」

自分の本心が言わせているわけじゃない。痴態は全て言霊のせいだと心に語りかけ続けることで、リザは何とか自身を保った。

ブラカップの片方も上にずらし、肌の甘い麝香じやこうと共に、瑞々しい果実のような巨乳をお

披露目させる。

「やっぱ、でけえな……。しゃぶりつけてえ……」

「でへへ、乳首もしっかり勃ってやがる。うわあ、なんてやらしそうな形……」

男子らの下品な感想すら、肌に染み込んで、乳肉の脂肪内部からむず痒くなった。彼ら

の反応を肉果実悦んでいよう、下から持ち上げるように掌を添えると、ゆっくり揉みしだきながらその柔らかさを見せつけ、揺らしては興奮を煽ってしまう。

——何をしてるの、私は……、こ、ここまで、要求されていないのに……。

肉体は確かな発情を示しているが、今でも恥辱に苦しんでいる。最初に要求された条件はもうクリアしていて、これ以上感じる必要はなかった。

惨めにイク姿だけは見せたくない——その一心だけで、全身を廻り続ける快感を抑え込もうとしていたのだが、

「アソコっ、ズボズボするところ、見てえっ！」

手は勝手に、肉壺に挿入した指先を激しくピストンさせ始めた。

ぬぢゅっ！　じゅぷじゅぷっ——っ！　第一関節が尿道と膀胱の境の周辺、その裏側を重点的に擦り付けてくる。

——ヒっ……、そこっ、か、感じすぎるう！

ピチャピチャと牝汁を飛び散らせ、背筋を仰け反らせるようにしながら、強い性感に喘ぐ姿を見せてしまう。

男子達もこれには唾を飲み込んで、瞳を血走らせながら、食い入るように見詰めてきた。無理やり犯すばかりで、本当にちゃんと絶頂を迎えようとしている女を見るのは初めてだったのだ。

そしてリザもまた、



柔らかな乳肉が鞭の衝撃に震え、蚯蚓腫れの痕が刻まれるたびに、鮮烈な痛みと、それと同等の快感が響いてしまう。

「おつ、鞭のたびにケツ孔が締まる。先生、もっと叩いてやって」

便女のアナルを犯し続ける男子の突き込みが苛烈になって、捲れ上がる皺孔から腸液が潮吹くように飛沫をあげた——ぬっぷ、ぬっぷ、ぶじゅ——っ！

「あっ……っんっ、ひゃんっ、あんっ……、お尻っ、えぐいつ……、オッパイ、いいつ、痛ひのっ、よくなっちゃううううっ！」

カッとなった教師の激情に任せた鞭打ちに、釣鐘状が歪み、絶頂間際の汗が飛び散る。腸内を肉棒でぐちゃぐちゃにされると、脳内まで掻き回されているように膨張し続ける快感が廻った。泣きながら食い縛るような美少女の表情が、欲情と嗜虐を助長してしまう。

「便所のくせに、叩かれて感じるのか、生意気だぞ。人間様に恥を掻かせて、勝手によがつてんじゃねえぞ。ハハ……アハハハっ」

力任せの打ち付けが、発情した乳首に当たると、

「イっっ！ ヒ——っ！ 痛いのれ……イグううう……」

ビクビクと全身を痙攣させながら、ヒクつく肉壺からプシャッと牝汁を飛び散らせ、

「俺も……出るう！」

ドブッ！ ドピュルルッ！ お腹に沸騰しそうな熱いものを放たれる感覚に、意識が飛びそうになった。

椅子に座っていた男子から手を離されると、そのまま力なく前に倒れ込む。同時にアナルから肉棒が抜けたが、途端にリザの皺孔はきゅつと窄んで、精液を閉じ込めた。

全ての男子の精液を飲み込むまで逆流させないように、リザは言霊をかけていた。唇からは涎だけが、アナルからは腸液だけが漏れている。

「ハア、ハア、やつと……あれ、何人だっけ……？」

今朝からずっと痛いと感じていいたくはない。思考は乱れきっていた。そのまま倒れさせておいて欲しいと願うのに、

「ほら、いつまで寝てんだよ。次は俺の番だ」

艶やかな黒髪を引っ張られ、強引に起こされるリザ。お願い、休ませて——その言葉を飲み込んで、先程の男子の隣の席に移動した彼女は、尻谷を自ら開きながら、杭のように突き出た肉棒に腰を沈めていくのだった。

*

学園を中心に、島全体に満ちた魔の瘴気は濃くなっていた。

リザや牡丹がこの島を訪れた最初は、感知できないほどのごく僅かなものであった。これは匂いと同じで、慣れると気付けなくなる。徐々に濃くなっていても、スペシャリストの二人でさえ、直ぐには分からない。

リザが最初に捕まって強姦された夜、蛭子川は意図的に魔瘴を濃くした。すると過敏な者からそれにあてられ、性格が過激な方へと向かうようになる。そこからは、学生らの抑

え込んでいたストレスや欲望が表に現われ、その邪念がますます魔瘴を濃くしてくれる。こんな場所にいたら、人間は正常ではられない。暴力的になり、本能的な欲求に突き動かされ、禁忌も関係なくなってしまう。その捌け口をたった一人にだけ向けているぶん、まだマシだと言えた。

そしてそんな尋常でない状況の原因を考える余裕はリザにはもうなくなっていた。

「ほら、しっかりとやんなさいよ、アンタが男子全員のザーメン受け入れないと、私達が犯されちゃうんだからね」

「しかし、臭っさいわね、こいつ。全身ザーメン臭っ！」

ひっきりなしに肛姦を続け、昼休みに突入したりは、やっと五十人ほどを抜いたところだった。男子の肉棒を咥え続けた皺孔は赤く腫れて、ヒリヒリとした痛み——それは同時に快感になってしまいが——を感じ、むず痒さを治めようと腰振りは止まらなくなっていく。

アナルよりも積極的に唇を求める者らも大勢いる。複数の男女に囲まれながらの休み時間の廊下では、M字に開脚しながら、左右から突き出された二人の男子の肉棒を掴んだ。

さっそくビクビクと脈動する反応を示してくれるそれが、愛おしくも感じてしまっただけにしようかと迷いながら、匂いのキツイ方を選んで接吻する。

「んっ……、お、おしゃぶり……します」

肉棒にキスされた男子は嬉しそうに見下ろしていたが、反対側は不服そうに、子供がお

ねだりするように自分で腰を動かし始めた。

——どうして？ 女子を散々レイプしてきた奴らなのに、か、可愛く思えちゃうなんて。じゅるっ、レロレロ……っ、いつ爆発してもおかしくないほどにパンパンに腫れ上がった肉棒を口内で温めながら、唇を肉茎に吸着させる。同時に、もう一方は熱い強張りを抜きたて、指が大量のカウパーで塗れてしまう。

カリ首の周りに舌を絡めながら、顔をゆつくりと前後させながら上目遣いで男子の様子を窺うと、

「ほおっ、すっげえ、気持ちいい」

恍惚のその表情に満足感すら生まれてしまうのだ。きつとそれは早くこの忌まわしい仕事を終えられるせい、そんな風に考えるようにするのだが、舌が敏感に肉棒の血管の浮き上がった形状に擦られると、彼の快感がそのままこちらにも伝わってくるようだった。

「くそっ、俺のもしやぶれよ」

手コキだけでは我慢できなくなった男子が我儘にリザの頬を突いてくる。麗しき顔にヌメヌメと淫水が付着して、その熱さに淫蜜と腸液が溢れてきてしまう。小さな下着では吸いきれないそれが、床に滴っていった。

ジンと下腹部が甘く痺れ、一本に張り付かせていた唇が微かに開くと、そこに躍りになって捻じ込もうとされてしまう。

「んんっ……、こ、これも……。はむ……。う」



同時に二本を口に含まと、大きく開かされた唇に隙間が生じて、唾液がだらだらと零れて、片乳を出した胸元へと落ちていく。

どう舌を絡ませていいか分からなくなっていると、二人の男子は狂おしそうに腰を振りだして、口内でクロスする二本が頬を突いて膨らまされる。

「おおっ、うぐっ……アふう、ふうっ……」

ぐちゃぐちゃと喉周りまで掻き回されて、嗚咽しそうな苦しみが湧くが、なのに腰は淫らにくねり、イマラチオの間に両手は勝手に、股間と乳房に向かってしまう。

——だ、だめっ、こ、こんなことしちゃ……。でも、う、疼く。

ピシっ！ 鞭が飛び、背中に衝撃が走った。激痛の快感に、プシャッと淫蜜を飛び散らせた。

「ちよつと、勝手にオナニーしてんじゃないわよ。両手は頭の後ろにしなさい」

積極的に監督役を努めたがる女子も増えてきた。こうして男子側の味方になることで、身の安全を守ると同時に、嗜虐的な欲求も満足させている。そこまでしないにしても、自分の身の可愛さと嗜虐心に憑りつかれた女子らは遠巻きに冷ややかな瞳を向けていた。

「元々の牝臭さも混じって、なんて下品で破廉恥な匂いだしてんの」

「まあ、便所なんだし、臭いのは当たり前か。この間、しょんべん飲んでいたって話だし」
「あ、いいね、それ。私も、後で飲ませてやろうか」

漏れ聞こえてくる意地悪な声にすら興奮を高められ、腹部に増してくる苦痛は快感を持

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

